

SDGs未来集落形成モデル事業 茅の活用を考える2日間



経営から地域づくりまで全国の事例を紹介



蒜山上徳山の市有地「鳩ヶ原」周辺に生い茂るススキを刈る



子どもたちも体験に参加

11月24日と25日に、蒜山地域で茅活用フォーラムと茅刈り体験会が開催されました。かつては人々の暮らしの中にありながら、現代社会からは程遠い存在となっている「茅の暮らし」が、「環境」「経済」「社会」が調和した「持続可能な暮らし」であるということから、世界的に見直されています。初日のフォーラムでは、環境先進地域であるヨーロッパなどの世界の茅葺き事情や、国内で茅を活用している事業者や地域団体の事例発表のほか、意見交換が行われ、参加者は、地域づくりから経済活動まで、幅広い視点で茅の今後の可能性について理解を深めました。二日目は、茅葺き職人の指導のもと、茅刈り作業を体験し、茅を実際に利用していくために必要な考え方や技術などを学びました。市では今後、蒜山の茅を市内の建築物に活用する試みや、商品化し経済価値を生み出す仕組みづくりなどについて市民と一緒に考えていきます。

11月25日から30日まで、北房地域にある荒木山古墳の調査が行われました。同古墳は、東塚古墳と西塚古墳の2つからなり、3世紀半ばから4世紀頃に築かれた、市内で最古級の古墳と考えられています。応募により集まった参加者は、同志社大学の津村宏臣准教授ら専門家の指導を受けながら、3D測量機や地中探査機といった最新機器を使い、古墳の大きさや形状、古墳内部の様子などを調査しました。

荒木山古墳調査プロジェクト 地域住民自ら古墳調査



地中探査機を使い古墳内部を探る



車いす体験をしてみよう

11月23日、久世エスパスセンターで第2回まにわ福祉フェスが開催されました。福祉作業所で作成した作品の展示、障がい者や高齢者の疑似体験をすることができるコーナーのほか、防災講座や、真庭市出身のシンガーソングライター影山さゆりさんのピアノの弾き語り、津山の障がい者団体「なかまあず」のダンスステージも行われ、会場を訪れた人たちは、いろいろな体験を楽しみながら、福祉への理解を深めていました。

第2回まにわ福祉フェス まんまる笑顔で来て見て知って

11/30 合同で山岳救助訓練

真庭市三阪の山林で、真庭・津山・美作の3消防本部による山岳救助訓練会が行われました。ロープなどの救助資機材を用いて急傾斜地の傷病者を搬送する訓練などに、3本部の救助隊員が取り組みました。



市長室から
こんにちは!

「真庭のシシ」とともに繁栄と勢いを

市民の皆さん、「真庭のシシ」を御存じでしょうか。昨年11月29日に旧遷喬尋常小学校の土広場で、真庭市から出るゴミから成る「シシ」のお披露目をしました。作者は現代アート作家の柴田英昭さん。ご活躍中で、玉野市宇野港にある「宇野のチヌ」の制作者で有名ですが、実は真庭市ご出身です。

自然・生活環境を大切に、永続的に繁栄することを目指している真庭市は、昨年国からSDGs未来都市に選定されました。現在、全国10都市の一つとしてSDGs推進交付金によるさまざまな事業を展開していますが、この「真庭のシシ」もその一環です。

真庭市は、産業・生活から出た廃棄物を有効活用することで、発生量を減らし、埋め立て、燃焼をゼロにすることを目指す（ゼロ・エミッション）ことを大きな目標にしますが、この素晴らしい芸術品に人々は大きな感銘を受け、行政にも貢献することでしょう。子どもたちに対しても意義ある環境教育となります。

「真庭のシシ」は、現在、北房の有志が作った素晴らしい大イルミネーションのあるコスモス広場で、地球を未来に繋げて行こうと訴えています。是非ご覧ください。

今年の干支はイノシシ。有害野獣の猪には退場を願い、真庭の繁栄と地球の未来のシンボル「真庭のシシ」に活躍してもらいます。皆さん、勢いのある幸せな1年にしようではありませんか。



チャールズ(ポニー)がニンジンをおねだり

11月29日、湯原小学校で馬とのふれあい体験が開催されました。真庭市は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、馬術競技強豪国ドイツのホストタウンに登録していて、市内の子供たちに馬とのふれあいを通じて馬術を身近に感じてもらうことが狙いです。子どもたちは、リオデジャネイロ五輪に出場した原田喜市選手の演技の見学や、馬への餌やりなどをして、馬とのふれあいを楽しんでいました。

馬とのふれあい体験
もっと身近に感じてもらうために



作り方を教わる児童たち

12月7日、勝山寿大学のメンバーが勝山小学校を訪れ、正月用しめ飾りの作り方を指導する「わら細工教室」が行われました。この取り組みは毎年、わらをなう技法を後世に伝えるため勝山小学校の児童を対象に行われています。今年も5年生2クラスの子が44人が手ほどきを受けながら挑戦。初めてわらをなう児童も多く、苦労していましたが、手伝わってもらいながら一生懸命しめ飾りを作っていました。

正月用しめ飾り わら細工教室
勝山寿大学から伝授